

ボリビアからの便り 2

—ボリビア・サンタクルス地区の動物たち その2（野生動物）—

北海道大学 総合博物館 資料部

近藤誠司(名誉教授)

昨年より、北大は JICA の草の根プロジェクト「日系人社会が牽引する持続的な循環型農業システム確立のための支援」という事業をボリビア東部の日系人居留地を中心に行っている。私はプロジェクトの長期滞在スタッフとして、ここ「オキナワ」に年間数ヶ月滞在している。そこで、このプロジェクトの概要やこちらで見聞きした風物を、「ボリビアからの便り」と銘打って、このページに掲載させていただいている。なお、プロジェクトについての詳細は Facebook の「<https://www.facebook.com/PROASIS.BJ>」を参照されたい。

前回の便り 2（その 1）ではここで見受けられる動物のうち、家畜を紹介した。今回は野生動物をいくつか紹介しよう。実は私は学生時代に、北大ヒグマ研究グループという（あやしげな！？）団体に所属しており、学生時代の 5 年間（留年も含めて）、野山で動物を追いかけ回す青春を送っていた。余談ながら、現在北海道ではヒグマの出没と被害が例年になく多いが、このニュースに解説で引っ張り出されている試験機関や大学の有識者はほとんどがこのクマ研出身者である。そういった経歴もあり、日本の、いや北海道の野生動物や鳥などには一通りの知識はあるが、ここボリビアではお初にお目にかかる動物がほとんどである。特に昆虫は、寡聞にしてさっぱり解らない。解らないままに、目についたものを書き連ねてみよう。

昆虫で一番印象的なのが、アリである。アリそのものより、アリの巣、いや蟻塚が草地や放牧地で目につく(写真1)。アフリカなどの映像では見たことはあったが、こうして放牧地にボコボコと乱立する蟻塚には驚いた。またこの蟻塚は非常に堅く、力一杯蹴っても崩れやしない。崩すにはブルドーザで押しなければ処理できない。赤土土壌の圃場はこういった蟻塚ができやすいらしいが、放っておくとこの写真の様になってしまい、草の生産量にも影響するだろう。この蟻塚の土はうまく崩して粉にするとテニスコートの砂に良いとも聞いたが、どうやら噂程度らしい。蟻塚としては、(写真2)の様に、別種のアリで地表から杭などに沿って塚を作る種や、牧柵や木の枝など空中に巣を作るものもある。

夜宿舎に帰ると、玄関ドア前の網戸に無数の昆虫がとまっており、網戸を開けるのに躊躇するほどである。昆虫好きにはたまらない亜熱帯地域の夏の夜だが、さほど関心のない私には迷惑なだけである。ある朝、部屋の床を這い回る大きな昆虫を発見し、捕まえてカウンターパートに見せたところ、「ゴッ、ゴキブリですう！」とのことだった(写真3)。よく見ると、我が国のゴキブリを一回り巨大化したようにもみえる。



(写真1、放牧地にたくさんある蟻塚)



(写真2、牧柵の根元に塚をつくるアリと、空中に蟻塚を作るアリ)



(写真3、ゴキブリ！？らしい)

先だって乾期の冬に、虫を見たときは感激した。試験用放牧地に電気牧柵を設置しているうちに薄暗くなってしまい、焦っていたところ、張った電気牧柵の各所に明りがポッと点滅する。「ええい、ショートしてやがる！」と焦るが、これがなんと虫であった。疲れて作業している中で、何だかほっとした瞬間であった。こちらの冬は、日中は30度を超える日も珍しくなく、朝夕20度を割る程度。札幌の夏と同じような気候で、虫がいてもおかしくない。

こうして明かりに集まってくる虫を食べる動物にヤモリが居る(写真4)。東南アジアではトッケイとか言う巨大なヤモリがいるらしいが、当地のヤモリはさほど大きくない。昆虫を捕食するカエルも巨大なヤツがいる(写真5)。写真は

どうやらガマガエル的一种らしいが、毒ガエルもいるので、やたら触らない方がいいようだ。遅くまで仕事して、オフィスの玄関を出たら、明かり下から大きなネズミの様なものが何匹もそそくさと逃げ出した。追いかけてみたら、ガマガエルみたいなカエルの群れだった。

ヤモリ以外の爬虫類でよく見かけるのがトカゲの類である。我が国のカナヘビやトカゲよりずっと大きく、体長が尻尾を含めると 50~70cm はあろうかという斑色のトカゲが時々道路や庭先を堂々と歩き回っている。アマゾンのジャングルの爬虫類のイメージはまず巨大な蛇であるが、残念ながら大きな蛇にはお目にかかっていない。オキナワ 1 の日博会館の資料室には巨大なアナコンダの皮が剥製となって飾られている (写真 6)。こういったサイズは今ではもうまず見られないという。



(写真 4、窓に張り付いたヤモリ)



(写真 5、不気味に大きいカエル、毒ガエルか?)



(写真6、OKINAWA1 の日博会館に飾られているアナコンダの皮)

現実に、絶対に気をつけて下さいといわれているへびは草むらやサトウキビ畑に結構な確率でいるガラガラへびである。サトウキビ収穫は機械で行う場合と、サプレーロというサトウキビ手刈り収穫者を雇用する場合がある。サプレーロは50人規模の集団でチームを作り、雇用されると農家の庭先にキャンプ村を作り、天候を見ては作業する。サトウキビの手刈り収穫では、面白いことにまず畑に火をかけて葉や穂を燃やし、焼け残った茎を刈り取っていく。面倒な葉の処理を省くということもあるが、もう一つの理由はガラガラへびなどを追い出すためだという。命がけの切実な理由だ。

他の爬虫類ではワニが多い。ワニの中でもカイマンといわれる種らしい (*Caimaninae*)。水田周辺の明渠にはウジャウジャおり、水草に紛れてよく見ないと解らない。(写真7)は橋の上からうまく撮影できた大きめのワニである。

毎朝、窓の外でけたたましい声で鳴く鳥がいるが名前が分からない。編み袋のような巣を作っていたが大風の日には飛んでしまった。(写真8)はやはり裏の池に

来たコウノトリの様な鳥である。コウノトリはユーラシア大陸の鳥なので、南米にいるのは「なんとかコウ」という鳥らしい。このほか、サギ類や猛禽類は様々な種類がたくさんいるがやはり名前が分からない。派手なくちばしの色と大きさですぐ解ったのはオニオオハシ (Toucan) で、綺麗な鳥だけど、写真は撮れなかった。

鳥の仲間、可愛らしかったのはアナホリフクロウである。(写真 9)はここオキナワ地区の農協 CAICO の支所の建物脇に棲んでいるアナホリフクロウである。近づくと番の二羽が威嚇するが、昆虫やへびを食べてくれるというので、支所職員が時々餌をやっているという。このフクロウは昼行性で、時々草地の牧柵に、1本ずつ番らしいペアが留まって通り過ぎる我々を眺めている。(写真 10)は夜遅くまでオフィスで仕事をしていたら飛び込んできたフクロウで、正確な名前は分からない。あちこち飛び回ってそのうち出て行った。

最近関東地方でも野生化して群れをなしているインコの仲間も多い。目立つのは緑色のハトくらいの大きさのインコで、けたたましい声で鳴き交わしながら飛んでいる。結実したソルゴーに集団で飛来して、小さな畑で網などがかけてなければ全滅に近い被害となる。

鳥の仲間、大きくて驚いたのが(写真 11)のダチョウである。「アフリカでもないのにダチョウが？」と驚く向きも多いただろうが、れっきとしたダチョウ、アメリカダチョウ/レア (*Rhea*) で、圃場などで時々見かける。作物を食い荒らし、電気牧柵などをなぎ倒していく結構な害獣、いや害鳥である。私は南米のダチョウについては、子供の頃読んだ「十五少年漂流記」に記載があって知って

いた。詳細は覚えていないが、少年たちがダチョウを見て漂着した島が南米近く
だろうと推測する場面があった。レアとアフリカのダチョウとの違いは、レアに
は首や大腿部にも羽毛が生えているところらしい。



(写真7、水辺でノンビリしているワニ)



(写真8、コウノトリの様な水鳥)



(写真9、アナホリフクロウと巣穴)



(写真 10、オフィスに深夜飛び込んで来たフクロウ)



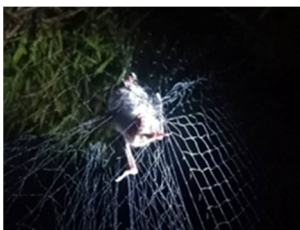
(写真 11、時速 60km で走る車の前を疾走するダチョウ)

最後に哺乳類に触れておこう。ここボリビアのサンタクルス地区は以前にも書いたように、戦後開拓されたアマゾンの源流に位置している。アマゾンといえば、何種類ものサルやジャガー、ピューマ、さらにナマケモノなどが想像されるだろう。ここサンタクルス地区にはまだまだ小さな森が残っているが、さすがにジャガーやピューマは見られない。ただ、ブラジルと隣接する東部森林地帯に牧

場を所有する農場主さん達の話を知ると、子牛をジャガーやピューマに獲られて、駆除したという話を聞く。

小さな森でもサルは居るらしく、道路で轢かれているサルらしい死体は見たことがあるし、また道ばたにカメラを持った人を含めて人だかりがしていたことがあり、通り過ぎてから「なんだったんだろう？」とカウンターパートに聞いたら、「ナマケモノがいるらしいですよ」とのこと。惜しいことをした。しっかり見れば良かった。アライグマもいるらしいが、これはまず滅多に見られないらしい。

森林地帯に牧場を所有する友人の農場主さんから、カシミヤ網を日本から買って来てくれないか、と頼まれたことがある。これがコウモリを捕まえるためだったのだ。山岳地帯では吸血コウモリが出没してウシにたかって吸血し、伝染病を媒介するらしい。それで、網でコウモリを捕らえて（写真 12）、ある種の薬品を塗布して放すと、巣に帰って他の個体に感染させてこれを死滅させるという処置をしているとのこと。それでその網には日本製のカシミヤ網が最も効果的らしいので、こうした依頼になった次第である。日本で、コウモリの研究者の友人らに尋ねたところ、「確かにカシミヤ網が良いけど購入するには環境省の許可があるので難しいだろう。それより目の細かい防鳥ネットを使ってみたらどうか？我々も防鳥ネットを使うことがある」とのこと。それで、製造元を聞いて交渉し、入手してポリビアで友人の農場主にお渡しした。



（写真 12、網にかかった吸血コウモリ）

その後、この網の顛末を聞いたところ傑作だった。現地でウシの体にニンニク液を塗布するとコウモリよけに効果があると聞き、彼は試しにやってみたそうだ。すると、非常に効果があり、網をかけずに済んでいるとのことだった。吸血コウモリは西洋の吸血鬼伝説の一部ともなった生物だが、ご存じのように吸血鬼ことバンパイアにはニンニクと十字架が効くことになっている。まさか本当に吸血コウモリにニンニクが効くとは思わなかった。十字架は知らんけど。

アルマジロも珍しくはない野生哺乳類だ。2000年にJICAの専門家としてアルゼンチンのパンパに行ったときには道を横切るアルマジロを何度か見たが、ボリビアではあまり見ない。ブラジルで長く仕事していた友人が、私がボリビアに行くと聞いて、「ブラジルではボリビアのアルマジロは美味しいというぞ」とアドバイスしてくれた。ただし、「アルマジロを食べるとハンセン氏病になる」とも聞いた」そうで、確かにネットで調べると「ブラジル西部のパラー州で採取されたココノオビアルマジロ (*Dasyus novemcinctus*) の62%が、ハンセン氏病の原因菌であるらい菌 (マイコバクテリウム・レプラ) を保有していることが明らかになった」という。ただし、ブラジル以外でもパラグアイでも食するらしく、当地ボリビアでも結構食される。アルマジロには大中小の三種があり、小さいのが一番美味しいと聞いた。

なおボリビアでは野生動物の捕獲は許可されていない。上記の子牛を獲る猛獣などもやむを得ず捕殺しているようだが、ワニもダチョウもアルマジロも獲ってはいけない。

最後に日本では近年「癒やし」の動物として有名になっているカピバラを紹介しよう。カピバラはスペイン語ではカピグアラ(Capiguara) という巨大な齧歯類、すなわちネズミの一種だ。こちらでは結構頻繁に見られる野生動物である(写真13)。日本では「癒やし」の動物になりすましているが、ここボリビアでは立派な害獣だ。私どものカウンターパートは広大なサトウキビ畑の他に水田も持っているが、生長しかけた稲の10%はカピバラにやられるという。「癒やし」どころか、農家にとっては極めて憎たらしいネズミの害獣モンスターである。だから、チャンスがあれば皆さん駆除する。ただし、写真の様に、成獣は中型の豚ほどもある巨大なネズミなので、うまく撃たないと、もしくは大口径の銃で撃たないと簡単には仕留められない。用水路に落ちた手負いのカピバラを捕まえようとして噛まれて大けがをした方もいるらしい。

前述のダチョウもカピバラも農家にとっては重大な害獣で、皆さんチャンスがあれば内々に駆除しているらしい。ただしどちらも美味しくはないらしく、エゾシカとは大違いである。一方、ワニは美味しく、レストランでも供される。カピバラは肉が臭いとか、いや季節によっては食べられるとか色々言われている。カピバラのチョリソーは美味しいと聞いているし、街角で売っていてもいる。当地のJICA 海外協力隊で活躍している女性隊員が、このカピバラチョリソーを食べて、お腹をこわして入院したとも聞いた。



(写真 13、悠々と稲作圃場を闊歩するカピバラ)

(4,936 字)